

パウロの喜び (5)

2008. 02. 19 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

テサロニケ人への手紙・第一 4章13節から18節

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

何年前か前に、仙台でしたか盛岡でしたか、F兄弟が証しして下さいました。

私は、62歳まで全く聖書と関係のない男でした。「性格の弱い人々だけが聖書を読むのだ。自分は稼いで、うんと遊ぼう」。これが私の考え方でした。しかし今は、聖書が私にとって一番楽しい本になったのです。一般的な本はだいたい一度だけ読むもので、繰り返して読む必要はありません。すでに内容がわかったから。もし二度目を読み始めたとしても、途中でやめるかもしれない。もうわかったから。けれど、聖書はいくら読んでも、読み尽くすことができないすばらしい本です。聖書とは『THE BOOK』、すなわち「本の中の本」そのものです。ほかに比べることができない、すばらしい宝物です。

私たちも「そうです」と、だいたいの方々が賛成するのではないのでしょうか。

今日は、M兄弟が証しして下さいます。何年前だったか忘れましたが、奥様が病気になりました。彼女は救いの確信を持っていました。私は娘さんと一緒に見舞いに行きました。気がついてみると、彼はいなくなっていたのです。台所のドアの陰へ逃げてしまったのです。つまり全く聞く耳をもっていなかったのです。しかし最近、どこの「よろこびの集い」へも、しかも外国までも、兄弟は飛んで行きます。つまり彼にとっても、聖書はすべてになりました。聖書こそ勇気を与える書物なのです。

ただ今読んでいただきました箇所が、そうなのではないかと思えます。すなわち、このテサロニケ第一の手紙の4章には、やがて起こるべき大いなる出来事が記されています。それはイエス様が再び来られる時のことです。

私たちは、イエス様のご再臨がいつになるかについて、もちろん計算することはできません。かつていろいろな宗教団体が、計算したのです。結局儲けるために、騙したのです。「イエス様は明後日来られるから、今日、貯金した金をおろして、献金した方がいいのではないか」と言われて、みんな騙されてしまったのです。みんなイエス様のご再臨の日を計算しましたが、計算をしてはいけない、と聖書ははっきり語っているのです。

そして教会歴史を見ると、「イエス様は来られる。近いうちに来られる」と期待を持っていた人々は、例外なく用いられるようになったのです。自分で経験したかどうか、関係はありません。しかし、待ち望まない人はイエス様を愛していない、とはっきり言えます。

イエス様は必ず来られます。それがいつであるのかはわかりません。主だけがご存じです。けれど、イエス様のご再臨がどのようなものであり、どのような形で行なわれるかについては、無知であってはならないのです。知るべきことです。

この4章をよりよく知るためには、聖書における時代区分をまず知らなくてはならないのではないかと思います。聖書によると、主が特に強く働ける場として、おもに次の三つに分けて考えることができます。

第一番目。いわゆる諸国民。

第二番目。イスラエル。

第三番目。イエス様のからだなる教会。

*第一の場面は、アダムからアブラハムに至る全人類です。

そのことについては、創世記1章から11章までに細かく記されています。5章と10章の系図によって、その時代がおおよそ二千年間であったことがわかります。

*第二の場面は、イスラエルの民です。

主がアブラハムを召された時から始まったのです。アブラハムの召しについては創世記12章に記されています。主は絶えずイスラエルの民にご自身を現わそうとなさいましたが、彼らは主に背き続け、最後には彼らの王である主イエス様を十字架につけて殺してしまったのです。アブラハムの召しからイエス様の十字架までも、おおよそ二千年間でした。

*第三の場面は、からだなる教会です。

教会とは、一つの団体ではありません。一つの組織でもありません。イエス様に属する兄弟姉妹です。この教会の誕生は、五旬節でした。教会が聖霊の降臨をいただいてユダヤ人、異邦人の区別が全くなくなりました。主のご目的はまさしくイエス様のよみがえりの

いのちによる「教会を建てる」ことであり、それによって信者が集められ一定の数に達したとき、そこで初めてイエス様のご再臨が成就されるのです。さらに、信者の数だけでなく、信じる者の成長をも主は望んでおられることは言うまでもありません。

初めから計画されていた信者の数が満たされる時、主イエス様が天から降って、教会と空中で出会い、一つになってくださるのです。その日、その時、すでに眠った信者も生きながらえている者とともに引き上げられ、花婿であるイエス様とともに、婚姻のときを持つことができるようになります。

このようにして教会が引き上げられた後、悪魔は非キリストと偽預言者とを通して、この世を支配するようになります。天上ではイエス様と信じる者との大いなる婚宴がなされているのに対して、この地上では大きな患難と苦しみで支配するようになります。

しかし、このような悪魔の支配も、いわゆるハルマゲドンの闘いによって、終止符を打たれるのです。その時地上では諸国民の大群がみなイスラエルに攻め上る、と聖書は記しています。まさにこの時にイエス様が公に再臨なさるのです。

初めは「教会」つまり「からだなる教会」を迎えに、花婿として空中まで降って来られたイエス様は、七年後に公に再臨なさる時には、信者たちとともにイスラエルの王として、また諸国民の裁判官として、来られるのです。その時、イスラエルに対して闘いを挑んだ諸国民の大群は完全に打ち滅ぼされ、イスラエルはイエス様を自分たちの王として迎え入れるようになる、と聖書は語っているのです。イエス様があらかじめ約束されていたダビデの座に着かれることによって、「千年王国」が始まるのです。

そして、千年経った後に、悪魔はもう一度力を盛り返し、しばらくの間だけ大群を引き連れ、イスラエルに対して最後の闘いを試みるのです。けれども、その時天から火が下って、彼らは全て焼き滅ぼされてしまうのです。その後、大いなる厳かな裁きが行なわれ、未信者は大いなる裁判官の前に出なければならず、またそこで裁かれるようになります。

多くの人々は、確かに裁きについて考えたくないでしょう。けれどもイエス様ご自身が裁かれる恐ろしさについて度々話されました。天の栄光についてよりも、イエス様は地獄の恐ろしさについて話されました。

アダムからアブラハムまで二千年、アブラハムからイエス様まで二千年、イエス様からこんにちまで約二千年であり、イエス様が教会を迎えに天から降って来られる日が非常に近いのではないのでしょうか。もちろんイエス様がお生まれになった日のことについては、誰もはっきりわかりません。何百年後に、いろいろな人々が一緒になって計算したのです。私たちは2008年と言いますが、本当かどうかわかりません。それは主だけがご存じです。ユダヤ人のカレンダーと私たちの使うカレンダーも違います。けれども、イエス様の来臨は近い、と世界の様子を見ても、誰もが認めざるを得ないのではないのでしょうか。

「イエス様が再び来られる」ということは、将来における非常に大きな出来事を意味する

わけです。イエス様との出会いによって、つまり「新しく生まれ変わる」ことによって、人間は新しい目的を持つようになります。

パウロの場合には、次のようなことば、すなわち「主よ。わたしは何をしたらよいのでしょうか」。或いは、「生きているのはもはや私ではなく、主イエスである」。このようなことばによって、彼が全く新しく生まれ変わったことがわかります。パウロは、後ろのものは忘れ、ただ前のものを目指して力を尽くしたのです。

私たちの目的は、主イエス様ご自身、すなわち十字架につけられ、復活なされた、そして再び来られるイエス様にほかなりません。信じる者の目的は、地上の生活をはるかに超えたところにあるのです。しかもイエス様は将来全てを支配してくださるのです。

二千年前ですが、イエス様は、次のように弟子たちに語られました。

ヨハネの福音書 14章2節、3節

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

すばらしい約束です。この「主のご再臨の時」こそ、信者一人一人が心から待ち望んでいるものです。イエス様のご再臨こそ、信じる者にとっては生き生きとした希望であり、信仰の光であり、イエス様に対する愛の原動力です。

三つの質問について考えたいと思います。

第一番目。第4章の主な内容は、いったい何か。

第二番目。第4章に対しては、どのような表題をつけることがふさわしいか。

第三番目。イエス様が来られる時に起こる出来事は、どのような順序でなされるか。

*第一番目の質問。第4章の主な内容は、いったい何か。

4章は二つに分けて考えることができます。

- ・前半は、1節から12節まで。信じる者の聖めについての箇所です。
- ・後半は、13節から18節まで。信じる者の希望についての箇所です。

もちろん聖めと望みは密接に結びついているため、切り離すことはできません。ヨハネ第一の手紙を読むとすぐわかります。聖められる大切さ、そして生ける希望を持つことについて、ヨハネは（おそらく百歳になってから）次のように書いたのです。

ヨハネの手紙・第一 3章2節、3節

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となるこ

とがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

「わかっています」とは、「確信する」という意味です。

*第二番目の質問。4章に対してどのような表題をつけることができるか。ふさわしいか。

例えば、『生き生きとした望み』、或いは『道と目標』、さらには『たぶん今日…』などという題をつけることができるのではないかと思います。ここではまず目標について考え、それから道について考えたいと思います。絶えず目標を目指している者にとっては、途中の苦しみや悩みはそれほど大きなものにはなりません。

イエス様のご再臨は、二つのこと、

- ・第一に、からだなる教会のためにイエス様は天から降って来られ、空中まで迎えに来てくださる。
 - ・第二に、からだなる教会とともに地上まで降って来てくださる。
- ということを含んでいます。

この第4章では、最初の事から、すなわちイエス様がからだなる教会のために降って来られることだけが記されています。このことについてもう少し詳しく調べてみると、次のようなことがわかります。

- ・第一番目の場合、イエス様は大きな患難の前に、からだなる教会のため空中まで降って来られますが、それを見ることができる者は誰もいません。次に、からだなる教会は天に引き上げられるようになります。
- ・これに対して第二番目の場合、イエス様が大きな患難の後に、イスラエルと諸国民のため、からだなる教会とともにこの地上まで降って来られます。その時には全ての者がはっきり見ることができ、エルサレムのオリーブ山に降られるのです。

*第三番目の質問。イエス様が来られる時起こる出来事はどのような順序でなされるのか。

第一に、イエス様ご自身が天から降って来られます。

第二に、イエス様にあって眠った人々、先に召された人々が初めによみがえります。

第三に、生きながらえている信者は引き上げられ、空中で主イエス様に会います。

この三つの点について、簡単に考えたいと思います。

- ・第一に、イエス様ご自身が天から降って来られます。

つまりイエス様ご自身とは、全宇宙を創造され、旧約聖書で預言されたメシヤであられ、ベツレヘムで奇跡的に生まれになり、最後に十字架につけられ、復活なされたイエス様です。そしてまさにそのお方が再び来られます。パウロに現われてくださったイエス様は、十字架上で死んでくださったイエス様にほかならなかったのです。

いわゆる近代的な聖書批判と呼ばれるものは、イエス様のご再臨を頭から否定しています。統一教会は、聖書に書かれているイエス様、すなわち十字架につけられ死んで復活されたイエス様は救い主ではなく、本当の救世主、すなわち再臨されるイエス様は別人であると言っているのです。韓国人である文鮮明こそ再臨されたキリストだと。もしそうだとしたら、今の世界はちょっと違うように見えるのではないのでしょうか。

聖書ははっきりと、「十字架の上で犠牲になられたイエス様ご自身」がやがて再臨され、しかも「そのイエスは、十字架の上で死なれた主イエス様である」と。

パウロはテサロニケの兄弟姉妹について、喜ばしい知らせを聞くことができたのです。テモテが信者について良い知らせを報告したからです。しかしながら、そのようなテサロニケの兄弟姉妹でも、死んだ兄弟姉妹が何人かいました。これは本当に悲しいことでした。そのためにテサロニケの信者たちは悩み、また苦しみました。異邦人が悲しむというのであれば、それは当然なことでしょう。なぜなら、異邦人は本当の希望がないからです。

パウロは次のような手紙を書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 4章13節

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。

「眠った」とは、すなわち先にイエス様を信じ召された人々のことです。「知らないでいてもらいたくありません」とは、知ってもらいたいということです。

確かに、信じる者は悲しくなりますし、寂しくもなります。けれど悩みながら、苦しみながら、大いに喜ぶことができます。「死は終わりではない」からです。良いもの、最も良いものは、死んでからやってきます。主の恵みは決して「死」で終わることがないのです。

・第二に、イエス様にあって眠っている人々が初めによみがえります。

先に召された人々は相変わらず先です。すなわちキリストにあって眠った人々とは、信じる者、恵みを受けることのできた者であり、死んだ人すべてがそうであるというわけではありません。ですから、「キリストにあって」という表現は非常に大切です。「キリストにあって」ということは、イエス様の血を、流された血潮を体験的に知ったことを意味しているのです。ある教会に属しているとか、洗礼を受けたとかということが大切なのではありません。イエス様を意識して自分の救い主として受け入れた者だけが、本当の意味で救わ

れているのです。「キリストにあって」とは、イエス様の霊によって新しく生まれ変わったことを意味しているのです。

このご再臨について、コリント第一の手紙15章を読むと、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 15章51節から53節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。

この箇所を読むと、「その時ラッパが響きわたる」と記されています。

有名な作曲家であるヘンデルは、よく知られている「メサイヤ」という曲の中でこの時の喜びと讃美とを声高らかに歌い上げているのです。パウロもイエス様とともにいること、すなわち死んでイエス様にお会いすることは、この地上で漫然と生きているよりはるかに良いと言っています。

そこで、死んだ人はどのようにして復活するかという疑問が生じてきます。答えは、同じく15章の35節から37節に書かれています。

コリント人への手紙・第一 15章35節から37節

ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。

42節から44節

死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

と記されています。その時、信じる者は新しい栄光のからだを持ってよみがえる、と聖書は語っています。人が死ぬとからだと霊とが分かれます。信じる者の霊はイエス様のもとに帰ってゆきます。

コリント第二の手紙の5章の中で、パウロは当時の人々を励ますために書いたのです。またこれこそが、初代教会の証しでもあります。

コリント人への手紙・第二 5章8節

私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。

そして、「からだは眠る」と聖書は記しています。肉体は、栄光のからだが出てくる芽のようなものです。死んだからだど、復活するからだとの間には一つの関係があるでしょう。それはちょうど種とつぼみのような関係です。イエス様がよみがえりのからだを持って墓からよみがえられたのと同じように、信じる者もよみがえりのからだを持ってよみがえるわけですが、その瞬間は、まさに決定的な瞬間なのです。私たちのからだは、イエス様と同じようによみがえりのからだになるのです。

・第三に、その時生きながらえている人々に何が起こるのか、ということです。

すなわち、生きながらえている信者は、引き上げられて空中で主イエス様と会います。聖書は、彼らが雲につつまれて引き上げられ空中で主と会う、と語っています。

もう一度テサロニケ第一の手紙に戻りまして、

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

同じ内容の箇所は、コリント第一の手紙の15章51節から53節です。

コリント人への手紙・第一 15章51節から53節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。

エノクは、そのようなものをすでに経験したのではないかと思います。彼も引き上げられ見えなくなった、と聖書は記しています。創世記の5章24節に、このエノクについて次のように書かれています。

創世記 5章24節

エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

神を信じただけではありません。「神とともに歩んだ」のです。しかも一瞬のうちにそのように彼は変えられたのです。彼も栄光のからだを持つようになったということです。

黙示録の19章7節、いわゆる小羊なるイエス様の婚姻についての箇所です。

ヨハネの黙示録 19章7節

「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。」

その時かしらなるイエス様は、からだなる教会と一つになられるのです。そしてイエス様は、彼らをご自分とともにいるように、彼らを見もとに引き寄せてくださるのです。

祈りの中で、イエス様はこのことについて考えて祈られたでしょう。ヨハネ伝の17章、イエス様のすばらしい祈りが書かれています。

ヨハネの福音書 17章24節

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしと いっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」

小羊の婚姻のとき、この願いは満たされるようになります。この大いなる出来事は、現在の暗やみの世界に、将来新しい光を与えていただく「まことの希望と望み」ではないでしょうか。この将来に起こる事実が、信じる者の生活の中に正しく受け入れられるとき、それが信者にとってまことの力となります。したがって、私たちは望みのない人のように悲しむ必要はないのです。私たちにはそのようなことをする権利がありません。私たちはみことばによって慰めと希望とを与えられています。

パウロは、前に読みましたテサロニケ第一の手紙4章15節に、「主のみことばによって」と言っています。したがってそれは決してパウロ自身の人間的な望みではなかったのです。また、それはイエス様のよみがえりからパウロが自分で考えて作り上げた結論でもありません。パウロは主のみことばによって啓示を受け、その啓示によって奥義を明らかにすることができたのです。パウロの喜びの源は、「みことば」でした。そして、私たちの場合もそうでなくてはならないでしょう。パウロが考えていたことは、決して現在の悩みや苦しみのことではなく、イエス様とともにいて御臨在を覚えることにほかならなかったのです。パウロは、「みことばをもって互いに慰め合いなさい」と言っています。

有名な音楽家であるヨハン・セバスチャン・バッハが、「死」について作曲した時、それらは全て讃美と歓喜に満たされていました。彼は、死の谷を見ただけでなく、死んでから永遠に主とともにいることを確信していたのです。

私たちが1時間のうちに死ぬということがわかったなら、いったいどうでしょうか。不安と心配でおののくのでしょうか。或いは、讃美と歓喜に満たされるのでしょうか。

「主は来られます」。毎日この事実について考えると見方も変わります。大いに喜ぶことができるようになります。

了